

MAEBASHI FOCUS

国際交流員 (CIR) ニュースレター

皆さん、ハウディ!

前回のニュースレターでもお伝えした通り、私とJOMO JETの仲間たちは、ここ数か月にわたって映画イベントの準備を進めてきましたが、このたびついに開催することができました。締め切りが近づくにつれてかなり慌ただしくなりましたが、当日はなんと参加者の皆さんに楽しんでいただける、充実したイベントを実施することができました!

第9号のニュースレターを読んでいない方のために簡単に説明すると、昨年12月頃から「JO映会」という映画イベントを企画していました(所属団体であるJOMO JETと“上映会”をかけた名前です)。数々の苦労や試行錯誤を経て、ようやく開催にこぎつけることができました。驚いたことに、定員30名の枠はすべて埋まり、私の予想を大きく上回りました。



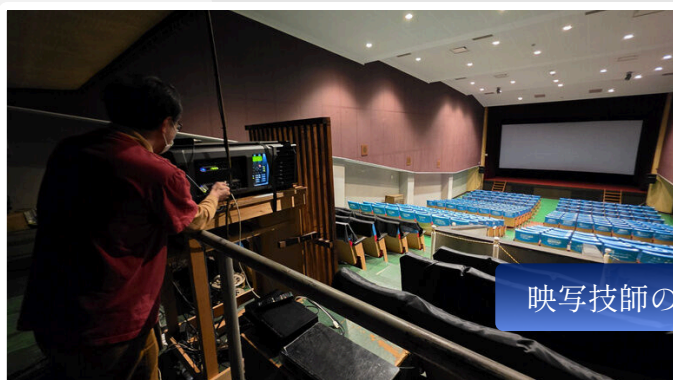
上映前の説明

イベントの内容としては、まず私が簡単な挨拶と説明を行い、上映へと移りました。今回のイベントでは、数々の権威ある賞を受賞した短編映画の上映権を確保しました。例えば英語作品としては、有名アニメーターであるドン・ハーツフェルトによる『明日の世界』を上映することができました。この作品はサンダンス映画祭短編部門グランプリやSXSW最優秀短編アニメ賞などを受賞しており、第88回アカデミー賞短編アニメーション部門にもノミネートされています。言うまでもなく、こうした作品を来場者の皆さんと共有できたことをとても嬉しく思っています。



ディスカッション

また、JOMO JETの使命である「群馬における文化交流の促進」を大切にしたいと考え、上映後にはディスカッションの時間も設けました。参加者はグループに分かれ、作品に関連したテーマについて話し合いました。例えば、「それぞれの作品のユーモアは、文化や言語の壁を越えて観客にうまく伝わったか」という質問もありました。



映写技師の視点

少なくとも私のグループでは、アメリカ映画のブラックユーモアの多くが日本人参加者には伝わっていなかったように感じましたし、逆に日本文化にあまり馴染みのない外国人の参加者は、日本映画のジョークを十分に理解できていなかったのではないかと思います。

とはいえ、作品全体のテーマやメッセージについては、ほとんどの参加者にある程度伝わっていたように思います。正直に言えば、今回私が選んだ作品は、かなり「奇妙な」と言っても過言ではない作品だったので、映画に慣れ親しんでいる人であっても、一度観ただけですべてを理解するのは難しかったと思います。ディスカッション中には、自分では思いつきもしなかったような解釈を耳にする場面が何度もあり、他の参加者が作品をどのように捉えているのかを聞くだけでも、私自身が作品への理解や感じ方をより深めることができました。

実際にイベントを運営してみると、十分に計画したつもりでも、自分でも信じられないような基本的な問題を見落としていたことに気づきました。例えば、受付時間を午後2時30分から2時50分までに設定し、その直後に上映を始める予定にしていたのですが、今振り返ると、この時間設定はあまりにも短すぎました。

当日は、参加者全員が時間通りに来るものだと甘く考えていましたが、5名が遅れて到着しました。そのため、上映は先に開始し、劇場スタッフの方々に静かに途中入場を対応していただくことになりました。

そのほかにも、自動販売機が施設内になかったことや、一部の参加者が会場までの道に迷ってしまうなど、いくつか問題はありました。しかし、そうした問題も含め、自分自身でイベントを企画・運営できたことは非常に貴重な経験となりました。次回イベントを開催する際には、より綿密に準備を行い、当日のトラブルにももっと迅速に対応できるようになると感じています。

総じて、このイベントはJOMO JETの仲間たち、そして参加してくださった皆さんのおかげで大成功となりました。すでに来年の「JO映会」開催が楽しみです!